

の埼玉県に於ける調査では最も好むものはヒル、ミミズ、又肥料の豆粕、メタセコイアなど食われる事もあると報告している。筆者の経験ではいろいろの植物の纖維又は、木片、土壌、アメリカサリガニの甲殻片などが食べられる。どちらかといふと動物性がよく好まれるものである。又キヤラメルまでと食べるのを見るに正しく人間と同様ではないかとさえ疑われるものである。これは味覚と関連して實に面白い現象である。食べる量は動物の種類によってもいろいろであるし、幼生期成体期によつても異なるものを一概にいう事は出来ないが多くの場合を考えるヒントによって時に水質が変化してそれが飼育動物に害を及ぼさない限り餌は多く与える事である。採取する量は動物の発育の段階によっても異なるし季節的にも異なるから一概には言えない。一般に冬季を中心に秋の終り頃から春季の始め頃迄は全餌をヒラギニ。しかし冬季間でも水温 25°C 位にするヒ一年中餌を攝取する。

成体で一日に中形のトノサマガエル一匹を一日で攝取したという報告（採集10：10）がある。この様に考えて行くヒ、本種は極めて雜食性ではあるが（どちらかといえば動物性を好み）一方6ヶ月間も飢餓に耐える事が出来るヒ見える。

採集雑記

福井市春山小学校 小林貞七

私が種々難多き採集をする様になつた動機は、昭和28年に福井市に博物館が設立される事が決定されこれからであります。およそ來漫標本の対象となる動物は一切収集する様にヒの博物館長の命令によるものであります。ずっと以前満洲におりました頃はあの土地の植物にひかれて南は旅順から北は満洲里にわたる採集旅行をした事もありますが、両棲類、爬虫類から魚類、棘皮動物、節足動物、腔腸海綿動物に渡るとの迄採集するとなるヒこれは容易ではないと思つたのであります。最初お引受けした時は、それ等の動物をどこでどんなにして採集しそれをどうして來漫標本にするかと見当がつかずすっかり困つてしましました。然し先輩の方々の教示を受け尽り様々なる人の協力によって、現在博物館に陳列されている六本のケースの標本ヒ資料室に保管中の千余点の標本を作成する事が出来、現在も尚細々乍らその仕事を続けております。

今日漸くいつ頃ヒコヘ行けばどんなものが採集出来るか、其の標本はどんなにすれば作り上げる事が出来るかヒ会得したような気が致します。次に私の勉強し

得たものの、一端を記述致します。話の順番として高等動物から下等動物へと進めて参ります。最初に手掛けたものは両棲爬虫類であります。私が曾て見た事もないカジカガエルの採集に永平寺の溪流へ私の子供三人を連れて出掛けましたのが田植前の5月下旬頃でした。寺の上流の谷間に於る事を廻いて、本山の前から川へ入って上方に歩いてまいりますが、一向に見当らないのでくたぶれて川岸に腰を下して一服していると、きれいな声で鳴くのを聞きつけました。足音をしのばして並付いて見るがどこにひそんでいるのか分らぬいで立止つてゐる。又鳴きました。ほんの一間程前の黒ずんだ石にひつたりとくつゝいて鳴いているのであります。然も、その石と殆んど区別のつかない見事な保護色であります。「カジカも鳴かずは捕えられまい」という気持で以後カジカ採集の要領を覚えたのであります。森青蛙も仲々見付からぬい蛙でこの蛙を捕えようと思つて漫然と歩き廻った所で恐らく一匹も捕えられなじでしよう。この蛙は山間の樹上生活をする蛙で有るからであります。ところが産卵期の5、6月頃になると、こそつて山近い田園や池に集つて來ます。そして水に近い木の枝や草に大きな華大の泡のかたまりの様なものを旌旗の蛙を作り上ゆるのであります。これが森青蛙の卵を取り囲んだ泡であります。この時期に採集をすれば容易なわけであります。カスミサンショウウオなども5、6月頃池や山田に産卵に來るのを捕えるのが一番だそうですが、私には採集の経験がありません。

亀の陸産ではイシガメヒクサガメの二種がありますがクサガメは敷も少ない様で仲々捕獲出来ません。春先や秋に子供にたのんで置くと時々見つかりますが、石亀との区別はクサガメには首に敷糸の黄色のまだらがあることや背中の甲に縦に走る三本の横線がある事を容易に見分けられます。この種の亀は非常に大きくなつて、時には甲にアオミドロのような藻類が生えている事がありますが、昔から蒙亀といつてゐるのはこの亀を指すのではないかと想います。私はこのクサガメを二匹標本に作った事があるのですが、これを殺すのには、随分と苦労致しました。爬虫類は一般に鍼車が生活をする様ですが、實に住生ぎわの悪いやつでクロロクオルムを鼻の先に差しておいても一時間後はまいらぬいで閉口します。ハンザギを殺した時は平常のろのろしているにかゝわらず、いざとなると仲々死なないばかりかのたうち廻つて累れる生への執念深さを見てはこの種の動物の採集は断念したくなる程です。大きな標品は容易にフォルマリンが浸透しないためか、内臓から腐つて未だ折角の標品を合なしにしてしまう事があります。殺すと同時に大きなものは肛門からフォルマリンの原液を注射器で沢山腸内に注入

してやります。クサガメの一匹はこの处置を怠つたため、完全に内部から腐つてしまつて失敗してしまいました。

浄浸にするに当つては体表に粘液の多い動物はこの粘液がすっかりなくなるまで洗つてやることが大切である。よく博物館の浄浸標本が液も濁らず、標品もすつきりときれいになつてゐるのは、どんなこつがあるのかヒアれますか、私の経験から云えれば町寧によく洗漂することと、新鮮な標品を迷ふ二つだと答えていきます。或る時大きな食用蛙を石鹼をフランシにつけて一時間程も洗つてゐるのを新聞記者が見けて、これは奇妙だと写真に写して帰つた事があります。魚なども十分洗つてやらねばならないものではナマズ、ウナギなどでしょう。然しいわしやうぐいなどはすぐ鱗が脱落してしまうので標品によつては水洗だけを終らなければならぬとのあります。今一つ心得たい事は陳列用の標本にするのだったら、形を整えて横式的な形態を保つてやることです。四肢を持つた両棲類には板にはりつけにして体形を整え formalin の液中につけて一週間程もはつておけばすっかり、その形を固定されてしまいます。みずかき一つでもこの方法で固定してやりたいと思ひます。標本瓶におさめる時もガラス板に木綿糸をしばつて入れるヒ一層見てと気持ちの良い標本が出来ます。formalin の濃度は 10% から 12% が普通で余り濃いものの中に浸すと、標品が脱水されて萎じる事が有り薄ければ腐つて来る心配があります。魚は生きたままを formalin 液中に板はさんでおくヒ縫てのひれを開いたまゝ死ぬのを整形する場合に大変楽ですが、なかなか惨劇です。私は標本作りで一番嫌な思いをするのは、大自然の中に楽しく遊んでいたものを捕えて殺す時です。成べく苦しませないヒ一気に成仏させたりたいのです。或機会に蛇を殺すことを覚えて蛇屋に大変ほめられて苦笑した事があります。それは頭から 10 cm 程の所を一撃する事ですが、心臓部に命中すればすぐ死にます。然しそう簡単に命中しないから断つて置きます。

淡水魚のアカザ(アカナマズ)やスイツメの採集に足羽川の上流へ出掛けた事がありますが、これ等の魚は浅瀬の石と石との間などにひそんでゐるので、大丈夫この辺に住んでいる筈だヒ一日中探ししまわって遂に一匹の採集も出来ないで空しく引揚げたことがあります。ヒコレが私の郷家の私の幼な頃よく捕えて遊んだ川岸へ行って探しするとたやすく何匹も採集出来たことがあります。こんな所から確実に住んでいる事が分っている場所に行かないヒ無駄骨を折る事が多いのです。ハコネサンショウウオの採集も同様な失敗をしたことがあります。

磯採集の始めの頃は採集の要領も分らず幼稚な事を繰返していました。オーデ

んな場所が適當なのか、どんな方法で採集すれば良いのかも充分知らぬで出掛けたのですからおかしな話です。然しこれも何度も海へ足を運ぶ度に様々な経験を重ねて、どうやら機採集が出来るようになりました。時に横浜大学の酒井博士の毎度の採集会との御指導は、参加者一同に海産動物への関心と興味を高めて頂いた点を大いに感謝いたしたいと思います。採集地を一番適當だと思われたのは、敦賀湾の常宮と若狭湾内に突き出した常神岬でした。こゝでは入江から島影になつて荒波の打寄せないところ、海藻の茂っている海、持ち上げられるような石の多い場所を察し海女に荒されない機会があつて理想的採集地の様に思います。機採集での収穫は實に多種多様で動物学を志す者は是非やつて見ねばならない仕事だと考えます。こゝから採集されたものは、貝類をはじめ、甲殻類、棘皮動物、脊索動物、軟体動物、蠕形動物、腔腸動物、海綿動物等實に広範囲な動物の生態に接する事が出来、その上手に多種多様な標品が手に入いるのだから興味も一入です。陛下が屢々海にお出ましになって採集されるお気持もこんな所にあるのではないかと想います。陛下の御研究で有名な御鰐類は常岬では可成多く手に入りその珍奇な形態と色彩には素人の吾々を魅する事多大です。又トビラ虫の御研究も深い旨承つてゐるが、陛下の御趣向にあやかって、この種の採集に私自身が興味を覚えるようになり、今年の夏ものさきの下に幾種のヒドロ虫を探し出して居んだものです。

或る時、シロガメの二、三株を採集して管瓶におさめて観察するとシロガメのボリップにオオワレカラが捕えられておだえている様子を見、自然の営みに大いに興味をそしりました。のぞきを見る海底の世界は時のたつのを忘れる思いがいたします。海底特異の光線(夢中の風景)の中に茂る海藻、その中を縁つて見え隠れするベラ、海の中ののんき者を思わせるフタなどの人を恋れない姿に彼等への貌愛感を覚えるのであります。私の今年の採集目次はホヤ類、ウミウシ類、ヒドロ虫類にあつたのですが、海藻の間に或は石の表面にそれ等を見つけて一つ一つを管瓶におさめていく楽しさは格別です。時には海藻の一ぱい着生した石を岸に引き上げて、その石の裏にひとむぎニ、ヒトテ、ゴカイ、ホヤの数々を拾い取り又ピンセットで海藻を子細に調べて次から次へ来る小さなエビやカニの収穫と仲々多いものです。管瓶に收めたものは持ち帰つてフォルマリンを二、三滴混入してやればそのまま標本になるのだから至極簡単なものですが、たゞこの採集されたものが何という動物であるか分からぬいと興味も薄いのですが

この点で毎年採集会にお出を頂いている酒井博士の御指導は恐らく隨一ではな

いかと思われます。

私の來った採集では屠殺場の墓集です。分類上から是非一通りの動物を集めたいと思って牛馬に寄生する絶虫や肝蛭を漬しに行つたのであります。然しそうやすやす絶虫や肝蛭は見当らなかつたが馬の頭虫や牛の吸虫を多數採集して帰り後程屠殺場の獣医様から絶虫もジストマも貰ひ受け、やつと目的を達した次第。お陰で屠殺の状況も詳しく見覚させてもらいました。こんなにして海から山へ川へ屠殺場へと私の採集は人々へ飛び廻って大変面白い経験をさせて頂きました。最後に乾燥標本の製作について、経験を申し上げます。カニ類、ヒトデ類、ウニ類の様なものをしたら簡単に燃え安価にできるので一度試して見られる事をお進め致します。先標題を一週間許かりフォルマリン液に漬しておいて、夏だったら、天日で乾燥すれば数日で干し上ります。天日乾燥出来ない期待には石油で作った手製の天日を度って、たどんなどビを弱火に燃して乾燥させても二日とすれば完全に乾燥します。たゞ乾燥に移る前に形を整えてやらないと乾いてからはどうにもならなくなります。褐色のひびいものは油絵具を着色すると見違える様になります。液浸標本では瓶代が高く困るのでですが、乾燥標本ではボール箱にでもおさめておけば良いのですから、昆虫の標本と同様に手軽に取扱えます。ガラスの入った標本箱に入れて壁面に飾るのも面白い趣好では無いかと思います。

大野郡下穴馬村九頭童川上流を歩いて

第一図 旭川学校 荒川 九兵衛

